

# 鍋のつる

**む**かし、入向山(現在の那珂町向山)は、額田千石溜の入江になっていたため、たくさん  
の野鳥の生息地でした。

江戸時代になって、近くに水戸家の菩提寺、向山常福寺が建てられてからは、このあたりで  
の猟は固く禁じられるようになりました。特に、冬になると渡ってくる鍋鶴は、いけどりに

ある日のこと、百姓の甚兵衛は、田んぼのあぜを  
ぎこちなく歩いている一羽の鍋鶴をみつ  
けました。近づいてみても飛び立つ気配  
がありません。

(どうしたんだろう。ぐあいでも悪いの  
かな? このままでは野良犬にやられ  
てしまうにちがいない。)

心やさしい甚兵衛は、鶴を家へつれて  
帰ることにしました。ところが、その  
夜のうちに、鶴はあつけなく

死んでしまったのです。  
たとえ、病気の鶴を介抱し

たとはいえ、死なせて  
しまつては、打ち首に  
なつてしまいます。

甚兵衛は、どうしたら

よいかわからず、仕事も

手につきませんでした。うわさは村中にひろまり、今にも

奉行所の耳にも届きそうな勢いで、心配した村人たちは、庄屋の弥兵衛に相談にいきました。弥兵衛は、胆のすわつた知恵者で人情の厚い人でした。

そして、しばらく考えた末に、「心配するほどのことではない。甚兵衛のうちの鍋のつるがこ  
われたので鍛冶屋につくつてもらつた、鍋のつるを打つのがすんだという話が、いつのまに  
鍋鶴が死んだといううわさになつてしまつた。そういうことだ。みんなつまらなうわさは気  
にせんで、今まで通り仕事に精を出しなさい。」

それから鶴のうわさをする者もなくなりました。弥兵衛から奉行所への働きかけもあり、甚  
兵衛へのおとがめはありませんでした。甚兵衛は、その後、屋敷内にお鶴大明神という社を  
たてておまつりしたということです。

